



【2013-04-06】

裏土御門 陰の長
者

連載第3回 「十津川郷」

虹岡 思惟造

第3章 十津川郷

無事に十津川郷に到着した掬磨が身を寄せたのは、郷内五十九箇村のほぼ中心に位置する折立村の前木藤右衛門の屋敷であった。その屋敷は折立の集落から少し奥まったところにあり、重畳たる山に囲まれていたが、裏手は十津川の深い渓谷で、谷底には筏を流すための溜まり場が設けられていた。周辺の山々から伐りだされた丸太を、谷底に落とし一定量が貯まったところで筏に組み、河口の新宮に流すのである。折立村は木材物流の拠点でもあった。

案内役の上相は、掬磨を送り届けるとすぐに自宅のある野尻村に行ってしまう、供の吉蔵も踵を返すように京都に帰ってしまったから、一人残された掬磨は、何をするにも勝手の違う山里暮らしに戸惑うばかりであった。



前木藤右衛門は郷内でも屈指の剣客と知られ、鏡之進という掬磨と同一歳の息子がいることから、掬磨の剣術の師匠に選ばれた人物である。前木家は代々折立村の庄屋を務める家柄で、その屋敷は質素ではあるが掬磨が寄宿するには十分な広さがあった。掬磨には奥まった一室が宛がわれ、寝起きはその部屋ですが、食事は前木家の家族と共にし、掃除や風呂の水汲み、柴刈など家事、雑事についても家族同様に行うよう申し渡されていた。これらについては事前に父からよく言い聞かされていたので覚悟していたが、食事の粗末なのはさすがに堪えた。京都の安倍家では毎食、白米が主食であったが、前木家のそれは、麦や稗などの雑穀と芋であり当初はなかなか喉に通らなかったのである。しかし厳しい剣術修行に明け暮れるようになって、そんなことに構っているどころではなくなって、出されたものは何でも食するようになる。

前木家の家族は、当主の藤右衛門とその妻のとよ、長男の鏡之進と十歳と八歳の二人の妹の五人であった。藤右衛門は剣術の指導においては厳しく掬磨に接したが、それ以外の時はしごく穏やかであり、とよも純朴な性格で何かとやさしくしてくれたので、戸惑うばかりの山里の暮らしにもやがて慣れていった。二人の幼い娘は、雅な雰囲気漂わす掬磨の立ち居振る舞いに最初は馴染めないようであったが、しばらくするとすっかり慣れ親しんで纏わりつく様にさえなった。しかし鏡之進ばかりは同一歳であり、また多感な年頃でもあったから、双方ともに、すんなりと胸襟を開くと言うわけには行かなかったのである。

鏡之進は幼い時から父である藤右衛門より剣の指導を受け、まだ十三歳でありながら早くも天稟の才能ありと郷内で噂になる程の腕前であった。剣術について強烈な自負があり、『京都の貴公子何するものぞ』という気概を持っていたのである。同じ屋敷で暮らすことになった掬磨の存在が疎ましく思えたのも無理はなかった。

ところで剣術の修業は、長きにわたり木刀を用いた型稽古で行われてきたが、幕末に至るとそ

の主流は、防具を身に着け竹刀で打ち合う方式に変わっていた。藤右衛門が免許皆伝を許された心形刀流もその例外ではなかった。江戸の四大道場の一つに数えられる心形刀流の錬武館でも竹刀と防具を用いた打ち込み稽古が行われていたのだが、藤右衛門は稽古に来る者達に昔ながらの組太刀による型稽古を課していた。それは貧しい郷土の子弟にとって竹刀、防具を揃えるのは容易でないという事情もあってのことであった。そのため時折行われた稽古試合でも木刀で相手を打ち込むことは禁じられていたのである。しかし鏝迫り合いから相手を突き飛ばすことや、柔術の技などを用いて投げ倒すことなどは許されていた。掬磨は稽古中に、体格に勝る鏡之進から体当たりを食らって吹き飛ばされたり、足を払われて倒されたりすることがしばしばであった。屋敷の平らに均された庭がその道場であったから、泥まみれ埃まみれにされてしまうのであった。鷹揚な性格の掬磨でも、このような無様な負けはさすがに悔しくて、修業に励んだ。後になって知ることになるのだが、このような経緯になることを父、晟義は最初から目論んでいたのである。

敵愾心をむき出しにして向かってくる鏡之進に負けまいと、一年も修業を続けるうちに、筋力は見違えるほどに強化され上背も伸びた。この頃になると鏡之進と試合してもそう簡単に押し負かされることはなくなった。急速に力をつけてきた掬磨を見て、折立村の郷土の間で、力技はともかく剣術では掬磨の方が鏡之進より上手だと囁く者が現れるようになった。掬磨とて十歳から剣の手ほどきを受け、その師から才能ありと評されたほどの者であったから、十津川で懸命に修業して剣の技が一段と上達したのである。この噂を聞き及んだ鏡之進は父に願い出て、掬磨と打ち合い形式の試合をする許しを乞うた。自分の方が剣術において優れていることを明確に示したかったのである。願いを聞いた藤右衛門は、思うところがあったようで、竹刀と防具を用いる方式で試合うことを許した。



その試合は早朝、屋敷の庭で藤右衛門の立ち会いの下に行われることになった。この試合のことは誰にも知らせていなかったなので、見物する者の姿はない。初夏とは言え山里の朝の空気は冷え冷えとしている。今までやかましく囁っていた雀の群れが軒先から去って行くと、辺りは急にしんと静まり返った。庭の中央では年代物の防具を身に着けた素足の二人が、藤右衛門から試合の注意を言い渡されていた。

「ええか、試合は一本勝負や、勝負ありとわしが判ずるまで休むことなく打ち合わねばならぬ。ほんで勝負の結果は素直に受け止め、決して遺恨を残したらあかん。それが誓えぬ言うやったら、この試合認めるわけにはゆかぬ。どないや、二人共わしの言うことに納得し、遺恨を残さぬと

誓うか」

「はい、誓いまする」

「わしもじゃ、父上、わしもきつと誓いまする」

二人が身に着けている防具は、藤右衛門が修業時代に使っていたもので、ところどころ綻びがあるような代物である。面と籠手を着けた二人は互いに礼をすると竹刀を中段に構えた。

「一本勝負、始め！」

藤右衛門が厳しい声音で勝負の開始を告げた。

鋭い気合を発した鏡之進が正眼の構えのまま、間合いを詰める。掬磨は無言で後じさりし剣先が触れ合う程の間合いを保つ。鏡之進は時折、気合を発しつつ、じりじりと押してくる。鏡之進の攻撃の鋭さを知る掬磨は、まともに打ち合う愚を避け、間合いを取って後退し続ける。そうこうするうちに、掬磨は庭の隅の菜園の縁まで追いつめられた。これ以上掬磨は後退できないと見た鏡之進が、竹刀を上段に振り上げた。得意技である上段からの面撃ちを仕掛けようとしたのだ。しかしその瞬間を待っていたかのように掬磨は大きく踏み込み胴を払いざま、鏡之進の脇をすり抜けた。かろうじて身をかかわした鏡之進が向き直り、今度は逆転する位置で二人は対峙した。互いにまた正眼の構えをとる。

その後も、掬磨が押し込まれる形勢に変わりはないが、鏡之進の攻撃に対し、抜き技や返し技で反撃するという攻防が続き、勝負は中々つかない。四半刻も経ったであろうか、この頃になると両者とも、汗みどろで呼吸も荒く肩で息をするほどになっていた。

「両者これまで！」

疲労困憊の極みと見た藤右衛門は試合の中止を宣した。

「両名とも井戸にて汗を流したら、わしの座敷に参れ、申し渡す儀がある」

息があがり返事をする声も出ないほど疲れ切った二人は、深々と礼をするのが精一杯であった。

身を清め、衣服を改めた二人が藤右衛門の座敷で神妙に控えている。決定的な打撃を受けなかったものの、打たれたあちこちが今になって熱を帯び痛みだした。鏡之進とて同じであろうが、身じろぎもせず正座している。しばらくすると廊下を歩く足音が近づき、藤右衛門が座敷に入って来て床の間の前に座った。二人は低頭して迎え、師匠の言葉を待つ姿勢をとった。

「今日の立ち合いは勝負がつかない。この結果でいうたら、お主たちの腕前は互角の力量ちゅうわけや。先ずは両名とも、互いの力量をば認め、いらざる敵愾心は捨てよ、よいな」

「しかと承りました。鏡之進殿の力量のほど、元より充分承知しておりまする」

掬磨に続き鏡之進が言上する。

「父上のお言葉、心に刻みまする。掬磨様の腕前がかほどに上達しておったとは、正直思いの他やったけど、その力量の程、実際に試合ってよう分かりました。また掬磨様に対し、これまで素直に向き合えんでおったこと、未熟でござりました。どないか堪忍して下さい」

純朴な鏡之進の申し状に、掬磨も率直に挨拶を返す。

「公家育ちの悪い癖で、人さまの心情を思いやるのが苦手なのです。鏡之進殿には何かと心障り

の振る舞いをしたと存じますがどうかお許し下さい」

「二人ともよう申した。これよりはいがみ合うことなく、互いに切磋琢磨して剣の道に精進せよ」

藤右衛門は満足そうに二人の顔を見比べていたが、形を改めて言葉を続けた。

「かねてより言い聞かせておるが、心形刀流においては心の修養こそが第一義や、心正しければ技正しく、心の修養足らざれば技乱れるちゅうのが流儀の根底であることを忘れてはならぬ」

藤右衛門は鏡之進がこのところ慢心気味であり、今日の試合でも相手を侮り、勝ちを急いだ心の在り様が技を鈍らせたとして、心の修業に一層励むよう諭した。掬麿に対しては、更に剣の技に磨きをかけることと、心の冷静さも大切だが、勝負にかける熱き気概もまた大切であると教えた。掬麿のものごとにこだわらない性格が、勝負の世界では思わぬ命取りになりかねないことを危惧しての師匠の言葉であった。

この試合を機に、掬麿と鏡之進はこれまでのわだかまりを捨て修業に励んだ。その成果は、十津川郷あげての一大行事である剣術大会で如実に示されることになった。村対抗試合は団体戦で行われるが、折立村が二人の活躍により、年少の部において最優秀の栄に輝いたのである。このようなこともあって、二人の仲は更に深まっていった。

この剣術大会ではもう一人その活躍が注目された者がいた。幼少の部に出場した、中井庄五郎、8歳である。庄五郎は5歳のときから藤右衛門の下に稽古に通っていたが、生まれつき毛が濃くて、稽古に集まる子供たちから「熊ん子」「ひげわらし」などと囃子立てられほど、その全身が黒い毛で被われていた。そんな風体のために、一緒に稽古する子供たちから、馬鹿にされていたが、本人は気にする風もなく熱心に稽古に通ってきた。掬麿はそんな庄五郎が好もしく思えて、よく稽古をつけてやっていたのだが、その庄五郎が剣術大会で群を抜く成績を納めたのであった。そうになると、誰もがその剣の才を認めるところとなり、からかったり、馬鹿にしたりするような者は以降なくなったのである。

この中井庄五郎、成人してから剣客として名を馳せるようになり、溥明と奇しき縁で再び係りを持つようになる。

～次号に続く～